

十二冊定書に、寶圓寺々領二百二拾三石二斗五升、内九石六斗五升は元和二年御檢地之刻打滅也。殘る二百拾三石六斗今程寺領之收納米高也。四貫六百九拾八匁二分六厘祠堂本銀、外に九拾三匁九分七厘二歩之步入。但し朱封丁銀に直し歩也。二口ノ四貫七百九拾二匁二分三厘唯今銀高也。とあり。

○塔頭永昌寺

此の塔頭は、寶圓寺門前にあり。由來書に云ふ。慶長十八年寶圓寺四代量山繁應和尚創立。寶圓寺代々和尚入院之節、宿寺相勤付修繕方等被仰付。且御法事之節、諷經之宿寺相勤候。依而延享五年二月三日於寶圓寺高德公百五十回御忌御取越御法會之節、寺中及大破再建致し、内作事出來不致に付銀三千枚被下。とありて、舊藩中は藩費營繕所なりしかど、無檀無住の寺院なりし處、明治五年十一月七日太政官より、無檀無住の寺院は、渾て被廢の旨御達し相成る。依之伺の上、翌六年永昌寺の寺號を廢し、鶴來村一閑院を爰に移轉す。

○一閑院

此の寺従前は石川郡鶴來村の入口なる岳上にありて、鶴來の一閑院と呼べり。貞享二年の由來書に、當院開基寛永八年に寶圓寺五世泰山雲堯和尚、芳春院殿御取立之長老なる故、石川郡鶴來村山林致拜領建立仕。と見え、改作所舊記貞享四年三月の書上に、寶圓寺一閑院屋敷高四石、但し山の平懸け、右劔村御高之内寛永八年雲堯和尚屋敷拜領。其次之住持血外和尚今の一閑院和尚迄三代罷成。とあり。能登國鹿島郡小島村長齡寺記に、長齡寺三世泰山雲堯大和尚、慶安元年正月廿七日遷化。大和尚者朝倉家之末葉也。後加州野田桃雲寺住職、劔一閑院開山也。と見え、國事昌披問答に、桃雲寺二代の住侶泰山和尚は朝倉義景の二男と云ふ。義景の嫡子は早世也。愛王丸と云ひしは、天正元年父義景滅亡の時、丹羽五郎左衛門長秀に仰せて誅せられたり。此の時泰山は二歳なりしを、乳母抱きて加州へ落ち隠れ居て、後芳春院殿へ乳母に奉仕する處、芳春院殿御介抱にて成長し、出家にせらる。と見えたり。桃雲寺に傳來せる利長卿より山崎長門・村井出雲へ賜はる眞筆の親簡に。  
(芳春院) わざと申入候。依のどの寺うんぎよと申ばうす、はうしゆ

いんより御おき候(は)わん由候間、きもをいれ、かのうんぎよ、のだへしす(あ)へられて可給候。たのみ入候(し)。

九月廿日

山 長 門

出 雲

は ひ

龜尾記に、桃雲寺は神谷丹波 篠原出羽の造立せし小庵なるを、慶長五年瑞龍公造營ありて、寶圓寺二世象山長老隱居住職に命ぜらる。二代泰山和尚は朝倉義景の末支乙若、芳春夫人殊に愛之給ひ、薙髮して泰山と稱し、桃雲寺へ住職せしめ給ふ。元和三年桃雲寺焼失す。此の時芳春院君より再興を命ぜられ、後泰山和尚鶴來一閑院を造立して爰に隱居すと云々。

○龍峰山瑞雲寺

曹洞宗なり。舊寺地は大乗寺坂の高にありしかど、明治十九年五月陸軍營所の御用地と成り、同年秋寶圓寺の境内へ移轉し、堂宇等を引移す。貞享二年の由來書に云ふ。當寺開祖武州永福寺五代州山和尚、寛正六年越前國府中に寺建立。三代蘭室和尚利家卿金澤御入城以後、天正十八年に金

澤へ引越。則寺西市正先祖宗與言上致し、木新保にて寺屋敷千八百拾歩拜領し、即宗與開基と成、寺院取立之處、其後利常卿之時木新保の寺屋敷用地と成被召上、小立野に而代地として先歩敷之通賜之。とあり。寺西宗與は寺西氏の元祖に而、代々寺の開基且那也。

○寶圓寺裏門

従前は寶圓寺の裏門とて門戸あり。此の門の礎石は、甚だ大石にて、裏門の礎石に非ず。寺傳に云ふ。昔は寺の表口なる山門爰にありて、則ち山門の礎石なりと云ふ。按ずるに、寺記に、天正十一年癸未利家卿築于城郭於加之金澤。即于城之東南之際再造立寶圓禪寺。云々。曾依瑞夢之感。城門與寺門相對。山號護國山。とあり。又菅家見聞集に、寛文九年寶圓寺佛閣・僧坊新に造營被命。于時寺門を改めて小立野馬坂の上に開き、額を護國山と懸けらる。とありて、其の初めの堂宇は西向にて、山門と城内石川門と遙に相對し建立ありしかど、寛文九年に綱紀卿再建を命ぜられし時、寺門を改めて今の如く馬坂口を表口となし、山門を造營ありて、従前の表門は裏門と成りたり。されば裏門の稱號は、